

「定家」を歩く

旅の僧が都の上京あたりに来てみると、にわか降りだした時雨に足を留められます。能「定家」の舞台である「上京あたり」は、私の家から車で二十分ほどの京都市上京区千本今出川通りの交差点東のあたりです。近くには千本釈迦堂や千本系んま堂、北野天満宮など、今も観光名所として有名な寺が多く点在するうえに、西陣や上七軒などの、古くからの商業地域として栄える賑やかな場所でもあります。今回訪れた時もちょうど地蔵盆の時期にあたり、そこ此処のお寺や、少し奥まった路地の地蔵尊には地蔵盆の赤い提灯が沢山並べられ、近所の大人や小さな子供が集まっておりました。大文字五山の送り火のあと、暑かった京都の夏の終わりを告げる風物詩です。

さて、このあたりは桜の名所でもあったらしく、また、『応仁記』によれば「千に両歡喜寺、此ノ寺二定家葛ノ墓アリ」ともあります。応仁の乱で消失したという両歡喜寺、すなわち大聖歡喜寺と大歡喜寺は、現在の指月山般舟院（京都市上京区千本今出川東）と考えられているようですが、それを示す碑もなく、本堂には地蔵尊が祭られておりました。また、般舟院の西隣には宮内庁が管轄する般舟院陵がありましたが、後花園・後水尾・後奈良天皇分骨所に並んで皇子皇女のお名前はあったものの、今回の曲の主人公、後白河天皇第三皇女・式子内親王のお名前はなく、定家が死んでなお執心の蔦葛となったという内親王の陵墓の手がかりを見つけないことはできませんでした。能楽史跡めぐりの本などでみる般舟院御陵の西にある石塔をカメラに収めました。これも式子内親王の墓といわれるだけであり、定家ではないそうです。

替わりに四十年ほど前に父・廣田陞一が「定家」の謡を勤めたという、右京区嵯峨厭離庵に足を伸ばして参りました。此処は定家の別荘があり、晩年を過ごしたとされる地でもあります。また、定家が式子内親王の「玉の緒よ 絶えなば絶えね」の歌を小倉百人一首に選じた所縁の場所としても有名です。父が「定家」を謡った当時は後援者のご好意で定家卿ゆかりの厭離庵で謡いの会が催されたそうですが、現在は門が閉ざされて拝観することはできません。庵の東側にある為家（定家の息子）の墓碑とその隣の「定家卿墳遥拝所」より厭離庵を望むことにいたしました。

京都市内のそれも自宅からごく近くにありながら、なぜかここという場所に行き着けない。今回は能「定家」の所縁の地を歩きながら、内親王の面影を見たようで実は定家葛に阻まれ続けたような、そんな気持ちで帰途につきました。誰にも知られたくない…、二人の深く密やかな想いに触れた気がいたしました。

平成二十年 神無月吉日

廣田 幸稔

千本今出川の交差点
「上京あたり」の指月山般舟院



宮内庁「般舟院陵」
御陵の西にある式子内親王の墓といわれる石塔



為家（定家の息子）の墓碑



右京区嵯峨厭離庵、
定家が晩年を過ごした別荘
定家卿墳遥拝所

